

街の子

竹久夢二

青空文庫

それは、土曜日の晩でした。

はるたろう

春太郎は風呂屋から飛んで帰りました。春太郎が、湯から上あがって着物をきいていると、その壁の上にジャツキイ・クウガンが、ヴァイオリンを持って、街を歩いている絵をかいた、大きなポスターが、そこにかかっているのです。

十二月一日より

ジャツキイ・クウガン 街の子

キネマ館にて

と書いてあるのです。それを見た春太郎は、大急ぎで帯をぐるぐる巻きにして、家へ飛んでかえりました。

春太郎は、ジャツキイ・クウガンが大好きで、ジャツキイの写真はたいてい見ていました。だからもう今では、ジャツキイの顔を見ると、長い間のお友達のような気がするのです。

「お母様かあさん、いつでもいいでしょうねえ」

春太郎はるたろうはそう言つて、お母様にせがみました。

「でも一人ではいけませんよ。お姉様ねえさんとならいいけど」

「うん、じゃあお姉様と、ね、そんならいいでしょう」

春太郎はお姉様のところへ飛んでいつて、たのみました。

「お母様は、行つてもいいいつておっしゃつたの？」

「ええ、お姉様とならいいって」

「じゃ、行つてあげるわ」

「うれしいな、これからすぐですよ」

春太郎は、お姉様につれられて、キネマ館へゆきました。二階の正面に坐つて、ベルの鳴るのを待っていました。

しばらくすると、ベルが鳴つて、ちかちかちかちかと、フィルムまわの廻る音がしましたかとおもうと、ぱつと、ジャツキイの姿が、眼めのまえにあらわれました。ぱちぱちぱちと、春太郎も思わず手をたたきました。

「ここに、カリフォルニアの片田舎かたいなかに、ひとりの少年がいました。その名を……」

と弁士がへんな声を出して、説明をはじめました。春太郎は、弁士の説明なんかどうでもいいのでした。ただ、ジャツキイが出てきて、笑ったり、泣いたり、歩いたり、坐ったりすれば、それだけで十分いいのでした。ジャツキイが泣くときには、春太郎も悲しくなるし、笑うときには、やはりうれしくなつて笑いだすのでした。

ジャツキイのお母様が死んでから、ジャツキイは、育てられたお祖父^{じい}さんお祖母^{ばあ}さんに別れて、お母様の形見のヴァイオリンを、たった一つ持ったままで、街へ出てゆきました。

ちようど、これはクリスマスの晩のことで、立派な家の窓から暖かそうな明りがさして、部屋のまん中には、大きなクリスマス

・ツリーが立っていていい着物をきた子供たちは、部屋の中を飛廻っていました。ある家の食堂の方からは、おいしそうな御馳走ごちそうの匂においがしているのです。

「ぼくには、何にもないや。お家うちも、クリスマス・ツリーも、御馳走も。お父様とうさんも、お母様もないや、なんにも、ないや」

ジャツキイはとぼとぼと歩きました。そのうちお腹なかはへつてくるし、寒さはさむし、そのうえ雪がだんだん降りつもって、道もわからず、それに一番わるいことは、どこへいったらいいか、ジャツキイにはあてがないことでした。

玩具屋おもちゃやの飾シヨウウインドウ窓には大きなテツデイ熊ベアが飾つてあります。

玩具屋の中から、大きな包をもった紳士が子供の手を引いて

出てきました。

「あの大きな包の中にはきつとたくさん玩具があるんだよ」

ジャツキイは、ぼんやりそれを見ているすと、

「おいおい危あぶないよ」

そう言つて、馬車の別当が、ジャツキイをつき飛ばしました。

どこか遠くの方で、オルガンの音がする。オルガンに足拍子をとりながら、沢山の天使がダンスをやっている。そこは、高い青い空で、空には数えきれないほどたくさん星が、ぴかぴか光っています。

「きれいだなあ」

ジャツキイは、夢を見ているような心持で、高い空を見ている

した。すると、白い髯ひげをはやした一人の老人としよりが、とぼとぼと歩いてきました。

「ああ、サンタクロスのお爺さんじいだ。きつとそうだよ。ぼくんとこへ、クリスマスの贈物を持ってくるんだよ。だけどおかしいなあ。袋を持っていないや。」

老人は、だんだんジャツキイの方へ近づいてきました。そしてジャツキイをだきあげて、自分のうちへつれて帰りました。家うちといつても貧しい屋根裏で、あくる日からジャツキイは、このお爺さんと二人で、ヴァイオリンをひいて、街を、はずれからはずれまで歩かねばなりませんでした。

お爺さんは、親切ないい人でしたが、ある日ジャツキイの子こもり

守唄うたをききながら、死んでしまいました。ジャツキイは、またある有名な音楽家に救われて、その家うちへ引取られてゆきました。食堂へはいると、そこに写真がかかっていました。それは一人の女の肖像でありました。ジャツキイはそれを見て

「ああ、お母かあさん様だ！」

その音楽家もびつくりしてしまいました。ジャツキイは、ポケットから、一枚の写真を出して、その音楽家に見せました。写真のうらには

ジャツキイへ、お前の母より

と書いてあるのです。その写真と、この額の写真とは、おなじ人でありました。

「お前はわたしの子だったのか」

音楽家は、ジャツキイをしつかり抱きしめて、ジャツキイの眼めからながれる嬉うれし涙を、ふいてやりました。

お父さんの音楽家の眼からも、玉のような涙がぼろぼろと流れました。春太郎はるたろうの眼からも、ぼろぼろと大きなのがころげました。春太郎のお姉ねえさん様も眼にハンケチをあてていました。

春太郎はるたろうは、学校へゆく道で考えました。早く雪が降ってくれといいな。そしてクリスマスの晩になるといいな。だけど、ジャツキイはどうしたろう。あれからすっかり幸しあわせ福せになつたかしら。まだあの大きなズボンをはいて、ロンドンの街を歩いているのじやないかしら。ぼくもロンドンへゆきたいな。お姉さんが死

んでしまつたら、ぼくお姉様のヴァイオリンを貰もらおうや。そして、クリスマス晩、ロンドンの街を歩くんだ。そうすると大きな、玩具屋おもちゃやがあつて、その飾シヨウウインドウ窓ベアに、テツデイ熊ベアがいるだろう。「おい危あぶない」で、空には星が、きらきら光つていて、袋を持たないサンタクロスのお爺じいさんがやってくる。ジャツキイがヴァイオリンをひいているのを、お爺さんがききながら、「うまい、うまい。ジャツキイは、今に大音楽家になるぞ」そう言つてほめました。

きつと、ぼくは大音楽家になるだろう。そして、ぼくのお父とうさ様も大音楽家なんだ。おや、おや。ぼくのお父様は、会社へ出てでいるんだっけ、

「カン、カン、カン」

「カン、カン、カン」

その時、春太郎は、いつの間にか、学校の前へ来ていました。いまちようど恰度、授業のはじまるベルが鳴っていました。

春太郎は、ジャツキイになることを急に思いとまって、おおいそぎで教室の方へ走ってゆきました。

青空文庫情報

底本：「童話集 春」小学館文庫、小学館

2004（平成16）年8月1日初版第1刷発行

底本の親本：「童話 春」研究社

1926（大正15）年12月

入力：noir

校正：noriko saito

2006年7月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

街の子

竹久夢二

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>